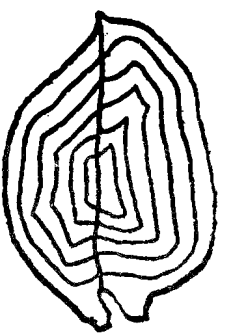
女であること(二)

川端康成



新潮社版

女であること（二）

昭和三十二年二月二十一日印刷・
昭和三十二年二月二十五日発行・
著者　川端康成・発行者東京都新
宿区矢来町七十一佐藤亮一・発行
所　株式会社新潮社・印刷者　東
京都千代田区神田神保町三ノ二三
塚田重・印刷　塚田印刷株式会社・
製本東京都千代田區神田猿楽町加
藤製本所・定価参百円・地方売価参百拾円

落丁本は本社又は御購買書店で取替へます。
Printed in Japan

目

次

つばめ飛ぶ……七
呼ぶもの……四一
だまって……五三
男のそとがわ……九七
一時間ちがい……一三一
まがりかど……一五六
娘さんには……一七九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

花火と貝がら……三〇二
中年の責任……三三五
いない人……三五四
その夜のこと……三七六
川へ出る……三〇一
遠いのぞみ……三三八

装幀　勅使河原　霞
挿絵　森田元子

女であること（二）

つばめ飛ぶ

晴れの二日つづいた、その季節はずれの熱さが、朝刊の記事になっている今日は、またも膚冷えのする雨だった。

「まったくこの気ちがい天気に、御苦労さまなことですわ。」と、村松はおどけてかさをひろげた。

くに子の死んだあとの桑原家の始末に、通いつづけている。市子の家へは、寝に帰るだけだ。

「こんなのがほんまにアフタア・サアビスというんでしょうな。」

「よくしておあげになりますわ。」と、市子は言った。

「奥さんのお知恵も借りたいんですが、みだりに人さまに相談を持ちかけないというのが、ぼくのいましめでしてね。なんしろ、桑原の親子はすっかり山井に負ぶさってたんで、依頼心ばかり強くなってるんです。中学生の娘は山井が死んでから、光一にまつわりついちゃって、光一がもし引越すと言おうものなら、狂言自殺でもしかねない風ですよ。これも末おそろしい。しかしまあ、光一の名が新聞に出ないですんだのは、助かったようなのでしたから……。」

「今日もお帰りはおそくなりますの？」

「わかりませんが、夕飯はお待ちにならないで。」

村松を送り出してしまうと、市子は一階の自分の椅子にもどって、毎朝のように、しばらく腰かける時間である。

庭の泰山木がもう大きいつぼみを持っている。白いつぼみはまだ青みを残している。そのそばのびわの小さい実も、薄黄に色づきはじめている。

昨日、おととい、近所の手つだいが来て芝を刈った。すべてみどりの伸びざかりだ。

刈りそろえた芝生すれすれに、つばめが一羽、さっきから飛びつづけている。ときどき下から真直ぐ吹き上げられるように高まっては、また低くおりる。

つばめの黒い背を目で追っているわけだが、白い腹をひるがえすと、市子はつばめの顔まではっきり見えるような気がする。いつまでもこの雨にぬれた芝生を飛んでいるつばめが、なにか話しかけに来たかのように思える。

小鳥を飼う妙子を呼んで、このつばめを見せたかった。市子はベルを押した。

「妙子ちゃんに、すぐおりていらっしゃいって……。」と、女中に言いつけた。

妙子は掃除をしていたのか、白いエプロンのまま出て来た。

「小母さま。」

「妙子ちゃん、あのつばめ……。うちの庭をはなれないのよ。」

芝生にふれるほど低く飛んでいるので、妙子ははじめつばめが目につかなかったらしい。

「なにかわたしに言いたそうでしょう。」と、市子はつばめを指さした。

妙子はガラス戸につかまって乗り出した。市子が結ってやった髪で、額からえり足まで、生え

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ぎわがみんな見えている。さかえよりよほときれいなように、市子は思った。このごろまた美しくなった。

さかえはあれから、朝は佐山より早く出かけ、夕方は先きに帰って来る。

市子にあまえることも、少しも変りがない。

市子は疑惑やしっとの向けようがないはずだが、さかえのなにものにもしはられぬ自由さに、絶えずおびやかされる思いだった。過去も約束も、さかえはたやすくこわせるのではないか。

そして、市子の感情を読むことは、鏡にうつすようにさとくて、あれから佐山の話はいっさいしない。佐山もさかえの名を口に出すのを避けているのではないか。それだけても、市子は佐山にもさかえにも、言いたいことが言えないような、息苦しさを感じる。

「さかえちゃんが佐山を愛してるのは、たしかたわ。」

佐山がこの年で、二十そこそこの娘を愛するなと、市子は思ってもみなかったが、そんな自分の方がしつはおかしい。

しかし、市子はさかえをとがめるなにものもない。みしめな一人ずもうの心に、いしけた影がゆらくはかりた。

庭の芝生を飛ふつはめまで、なにか市子に密告か警告に来たかのように見えたりする。

夕方の七時過きても明るくて、時間をまちがえるが、市子は佐山を待つともなく待ちなから、

さかえもどこかに佐山といっしょのような思いちがいをする。
「とっくに帰っているのに、さかえちゃんは……。」
市子はぎょっとした。
佐山を待たないで食事にしようと、三階のさかえと妙子を呼ぶために、廊下へ出ると、玄関に立っているさかえのうしろ姿を見た。
だれか来たらしい。
「びっくりしたわ。電話があるやないの？　いきなり来やはらんかて……。お食事どきに、なんや。」
「あんた、ちょっと見んまに、えらいきれいになったなあ。」と、さかえを見あげているのは、母の音子だった。
「どない案じたかしれんわ。もっと早う来んならんと、気ィが気ィやなかったけど、うちがあんな風にひっくりかえる、ごたごたでっしゃろ。出るにも出られやへんさかい……。」
「今ごろ、なにしに来やはったんです。」
「なにしにて、あんた、市子さんにも悪いし……。」
市子は音子の来るのを、心待ちしていたものの、やはり不意なおとずれだった。
音子は市子を見るなり涙ぐんだ。
「しらせといて下されば、お迎えに行ったのに。」
「お迎えなんて……。むかし、よくよせていただいたおうちやもの。このへん、あまり変ってい

ないんで、なつかしかったわ。もう、あれ、二十年も前なのかしら。おどろいたものね、月日は……。」

言葉づかいも、大方東京にもどっていた。

市子は音子のすきがない身なりを見て、

「音子さん、これなら大丈夫……。」と、女らしい安心とよろこびを感じた。

さかえの話では、毛織物の茶羽織など、もっそりひっかけて、神経痛のために、初夏になっても、別珍の色足袋をはいているということだった。

非運につきまとわれて、老い衰えた音子を、市子は思い描かされたものだが、さかえは誇張していたのだ。

ずいぶん老けてはいる。白毛も目につく。下目ぶたが薄黒くたるんで、しわが寄っている。しかし、さかえに聞いたほどではない。

化粧をしないで、品がよかった。

「さかえちゃん、なにをぼんやり突っ立ってるの？　お母さんの荷物を運びなさい。」と、市子は言った。

さかえは母が現われたのを、市子に照れてる。

音子にくつろいでもらうために、市子は二階の夫婦の居間へつれて行った。

さかえはだまって荷物をおくと、いなくなった。
音子は地味だが、古風なようで新鮮な感覚の、ひとこしの小紋を脱いで、旅行カバンから、ほどよく水の通った、結城のかすりを出して着かえた。
紺地に白茶の吉野格子の一重帯をしめながら、
「佐山さんにごあいさつしてから、着かえるんやったわ。」と、はじめてそのことに気づいたようだった。
「佐山はまだもどらないの。」
「やはりお盛んですのね。」
「大阪の村松さん、御存じなんですって？　あの方、佐山のお友だちで、今うちに泊ってらっしゃるのよ。」
「へええ、おどろいた。じゃあ、なおさらだわ。もう一度、着かえとこうかしらん。」
「村松さんもいつもどるかわからないし、なにもそう気取らなくてもいいでしょう。わたしをごらんなさい。このごろ、まるでかまわなくなったの。」
「あなたはいいわ。」
「ああ、帯をどうもありがとう。」
「もっと派手な色目でもよかったわ。あなたは少しも年を取らない。」
「うわべだけの若さでしょう。フランスの小説を読んでいたら、そういうのを（ミイラの若さ）だの（持ちのいい女）だのいうのだって、いやだと思ったわ。」

「いいじゃないの。わたしをごらんなさい。でも、こうして話していると、だんだん昔にかえるようやわ。」
「そうね。福原先生の七十七のお祝いに、出ていらっしゃればよかったのに。」
「それどころやなかったわ。大勢集まったの?」
「ええ。」
「市子さん、昔の貝がら、どうしやはった?」
「あるわ。お祝いの時にね、島津さんがおもしろいことを言ったの。生物学上の大発見だそうよ。つまり、恋敵というものも、死ぬことがあるって……。」
「死んだの?」と、音子は市子の顔を見つめた。
「そう。死んだの。」

島津という級友の恋敵も死んだのだろうが、ここで今、音子が市子にたずねたのは、無論、清野と結婚した女を指していた。そのひとが死んだと、東京会館で清野に会って聞いたことまでは、市子も言わなかった。
「そう? 死んだの?」と、音子は市子と同じ言葉を、疑問形でつぶやいて、
「あなたもあの人と結婚してたら、死んでやはったかもしれないわ。」
「いやだわ。どうして?」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c